

Title	認知の限界について
Author(s)	牟田, 隆郎
Citation	聖学院大学論叢,21(3) : 321-333
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=913
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

認知の限界について

牟 田 隆 郎

The Limitation of Cognition

Takao MUTA

Key words: Cognition, Distinction, Hypothesis, Limit, Meaning

生きていく上で大事なこと

毎日を恙無く暮す。不安なことや困ったことがない有難さ。環境に恵まれ、人とのつながりに満ち足りている幸せ……別に幸せな誰その生活の描写をしようとしているわけではない。

幸せであれ、時に不幸であれ、人々の日々の生活を支える大事なものがある。人らしく生きていくことを可能にしている、忘れてはならないものがある。それは何か。意外かもしれないが、それは「分かる」ということである。私たちは自らの有り様、周囲の状態を、不十分ではあれ「分かっている」からこそ生きていける。

そうではない場合を考えてみるとよい。それはいわば夢の中のような、しっかりとした手掛かりのない、流動的で定まらない、単なる事象の流れのようなものではないだろうか。あるいはごく単純な、いわば「白か黒か」に近い世界のようなものではないだろうか。最低限の生命維持システムがはたらいっているならば、命をつなぐことはできるだろう。情動に生体が満たされ、そのレベルでの生存戦略は機能しているだろう。しかしそれは、「人らしく」生きている状態にはほど遠いものである。

何がどうなっているのか、さっぱり事態が「分からない」からである。ひとつひとつ身の回りに生じていることの意味が、不明だからである。私たちが毎日生きていくその過程は、諸事態を「分かり」つつ（「分け」つつ）、状況をそして自分の状態や在り方を、密かにわきまえながらなされている。それはいわば世界像を安定的に確立しつつ、自分像を同時に固めていき、生きている世界を自明なものとして拓いていく過程である。

もっとも「密かに」と言ったように、そのことを「意識」することは普通あまりなく、漠とした

潜在的・持続的感覚のみを抱えていることになる。世界も私もあって当然、明々白々という感覚である。それは生きていく上で普通は問題にしようがない、深層に隠された大前提である。言い換えれば、生きている世界に対して、それが現に在るということへの信頼感を、無条件に抱いている状態である。

このように「分かる」ということは、「私たちが生きる」ということを支える根本的に大事な事柄である。私たちが動物や植物などではなく（別に見下しているわけではない）、人間として生きていく上で、「分かる」力をたくさん授かっていることを忘れてはならない。私たちが今現在生きているこの世界。そしてそれをそうと見・感じているこの私。これらを成立させ、これらをそのように現象させているのが「分かる」力である。

名前が分かる

私たちは、とにかくもろもろの事を分かっているからこそ生きていける。あるいはこれまで生きてくることができた。そこで考えてみたい。この「分かる」ということは一体どのようなことなのであろうか。この問いに答えるのは思うより難しいものである。「分かる」ということはとても当たり前のことで、何かすぐ説明ができそうな気になるかもしれない。ところがそのことを説明しようとする戸惑いが生じる。「分かるって、要するに分かることだろ」……とこれでは説明にならない。

事態を少し整理してみよう。例をあげて考えてみるのが良いかもしれない。遠くの方から人がこちらに向かって歩いてくる。ある程度近付いてくると、あ、あれは何なにさんだと「分かる」。この時何が起きているのであろうか。

まず私の中にその人に関する「記憶」がなければ分かりようがない。ということは、こちらに向かって歩いてくる人と、私の記憶の中の一人にその人が該当する。そのことが「分かる」ということになりそうだ。

歩いてくる人を認知して得られた諸情報が、記憶の中にあるその人の諸情報とかなりの程度（あるいは全部？）一致していることが生じている。時には見間違いも有り得る。しかしそれはその人に関する認知情報が増えれば、普通は間違いだと気付く。

あれは何々さんだと、この気付きは「名前」をそこに呼び出すことで完了する。このタイプの「分かる」は、人であれ、事物や出来事であれ、名前がついているものに関して当てはまる。私たちは、小さい頃から膨大な数の名前を覚え込んできている。この覚えている名前の数が多ければ多いほど、物事を、事態をより明確に認識する機会を得やすい。

今あげた例は、外界のもののもつ名前と記憶中にある名前とが最終的に一致した場合である。しかしそこでは、単純に名前と名前の一致が生じている訳ではもちろんない。その名前に代表される

もろもろの要素が背景に必らず控えている。名前と名前の一致とは、またそれぞれの背景の要素(群)の一致(部分的・全体的)でもある。

ただし通常、名前を知る・名前が浮かぶことにより、私たちはその背景の諸要素についてまで、わざわざ思いを致す(意識化する)ことは少ない。名前を知る・名前が浮かぶことによって、一応全てを認識した(分かった)と、いわばピリオドを打っている。思考エネルギーの節約や効率化がそこにあるのであろう。脳がそのように設計されているという捉え方もある。¹⁾

状態・状況が分かる

「分かる」ということは、名前に思い至るということだけではない。もう少し複雑な分かり方というものもありそうだ。

もっとも名前に思い至ることににおいても、複雑なあるいはとてもリアルな体験がそこに起きていると考えられる。ヘレン・ケラーが初めて「水・water」という言葉に出会った、あの有名なエピソードなどはそうであろう。

諸感覚や諸感情、諸知識が一気にまとめられ、ひとつの言葉に集約される。名前に初めて到達することが、時には鮮烈な体験につながることになる。私たち人間には、もともと名前や言葉を介して、対象・事象をよりリアルに感じ取る資質も付与されているらしい。

さてはなしを戻そう。一般にある名前に至るという分かり方よりも、もう少し複雑な分かり方がある。それは「状態・状況が分かる」という分かり方である。またそれは、状態・状況を単に一語で表わすことが難しいことが多く、言葉を連ねた表現が必要となるということでもある。

見晴らしの良い山の頂上に立ったとする。周囲をぐりと見回して、何が見えるのか確認する。この確認する作業はまた、「分かる・分かろうとする」作業である。あそこに見えるのが何なに山、こっちは何なに岳、その向うに何なに川、何なに平野という具合である。これらの作業を通して、私(たち)の頭の中には、今いる頂上を中心とした周囲360°のおおよその地形図が描かれる。イメージを残すことを伴うが、言葉による把握も行なわれる。これはとても一語では表わせない。

あるいは我が身の現在置かれている状況を考える。やるべき事はしかじか。これからのスケジュールはしかじか。おなかのすき具合は如何。あちらで喋っているのは誰それ。窓の外にとまっている鳥は何なに。今日の天気はこうこう……という具合。これなども、一語では表現できない分かり方であろう。

さてここまできて気付くことがある。状態・状況を「分かる」ということは、もっぱら自らの外側の環境に関しての「分かる」が多いということである。自分の身体の調子や抱いている思いや感情など、いわば内的なことを「分かる」ということも、もちろんあるにはある。しかしやはり環境事態を「分かる」ことのほうがかなり多いようだ。

その環境についてだが、やや特殊な環境というものもある。それが文字である。文章であり言葉である。このことを次に考察してみよう。

意味が分かる

まるで知らない国や文化の文字を見ても、当然「分からない」。シャンポリオンの業績は立派である。初めはさっぱり分からなかった文字や言葉を、自分たちの言語に置き換えたからである（ロゼッタ・ストーン）。

それにしてもそこで為されていることは何であろうか。ある言語から他言語への変換だけであろうか。もちろんそうではない。その言語が「意味」しているものを、その「意味」を、なるべく変えないように他言語へと変換している。そこでは「意味」の解説が中心である。文字列とはきっかけのようなものであり、「意味」を伝えることが本意のはずである。意味を伝えるために、文字を、言葉を、文章というかたちを利用する。

このことは話し言葉について考えてみると、さらに明確である。外国語を聞いた時、慣れてくれば、わざわざそれを日本語に直して分かろうとするのではない。直接その外国語が含んでいる意味を掴むことになる。意味が分かるというわけである。

話し言葉であれ書き言葉であれ、音声や記号を知覚し、その表わす「意味」を認識する。ところがその音声やその記号と、それらが示す意味とはもともと共通点はない。ただ対応しているというつながりはあるわけで、それを象徴機能という。この莫大なつながり上の約束があることにより、私たちは社会生活を営むことができる。

いずれにせよ、この「意味が分かる」という分かり方は、先の「名前が分かる」「状態・状況が分かる」場合よりも、遙かに複雑な分かり方である。先の2つの分かり方においても、意味というものは絡まってはいた。しかしこの「意味が分かる」では、私たちの内的世界がかなり大きな役割を演じている。

私たちの内部に「意味が分かる」「意味を生み出す」仕組みが備わっている。だがそれは一体どうなっているのであろうか。まだまだ脳のはたらきについては不明なことが多い。それでも、意味を生み出す基盤は脳にあり、その目指すところはやはり生存条件の向上・改善・維持にもとがあるのではないか。人間の場合は、この意味の内部体系がかなり複雑に、しかも時に環境から遊離して形成される。独自の内的意味世界を人間はもってしまう。

従って「意味が分かる」の分かり方の中には、客観的な該当対象がない場合もある。あるいは、いわゆる勝手な思い込みのようなものもあることになる。

人間のもつこの内的意味世界の多様さや広さ深さは、まさに人間独特の心の世界を現出させている。そしてその一部は、この世界の成り立ちや仕組みに対して向けられる。同様に、生命や意識、

ひいては私たち人間そのものにも向けられる。科学的認識を推進し、他方、倫理意識を向上させる。

その発展はずっとこの先も続きそうに思える。もしかしたら、この世界について余すところなく知り尽くし、コントロールすることができるかもしれない……と幻想を抱きもする。

このことはやはり「幻想」でしかないのだが、そのことを吟味する前に、まだ「分かる」ということが何であるのかの考察を、もう少し進めなければならない。

「分かる」ことの不思議さ

「名前が分かる」「状態・状況が分かる」「意味が分かる」と述べてきた。実はこれまで述べてきたことは、「分かる」という現象の一部に過ぎない。しかも「分かる」ということ、そのこと自体がどうなっているのかについては、あまり明らかになっていない。

「分かる」作業ないしは「分ける」作業の場が脳にあることは間違いない。脳がまわりの世界をどのように認知しているのか。例えば視覚の研究などはかなり進んできている。対象の像が眼球にまず捉えられる。それが各種の情報に分解され、種々の神経回路を経て、最終的にまとめられ、その対象の認知が為される……これで視覚的な「分かる」が明らかではないか。そう思える。

しかしよく考えてみよう。一体誰が、何が見えると分かるのか。その主体は何なのか？それは「私」か？確かに「分かる」ということは、世間一般的な現象ではない。この「私」が分かっているのである。この「私」が分かる主体である。

ではその「私」とは何なのか？「私」が脳の中のどこに居るのか？未だかつて人の脳の中にその人の主体があるのを見た人はいない。結局、「分かる」の主体である「私」は、脳の機能の中にか立ち現われない。あるいは私たちは、この身体・この脳の中に「私」というものがすっぽりと納まって（存在して）いると感じているに過ぎない。^{2) 3) 4)}

他者から見ると「その人」とは、その身体を在り処にし、様々な行動や言動を為し、まわりと多様な関係をもっているその総体ということになる。いわばそれはひとつの「記号」のようなものである。そしてその背景に、種々のものが抱え込まれ組み込まれている。

視点を「分かる私」に戻そう。ここからは推測中心のはなしになる。さてこの「分かる私」は、時々刻々と変化していく状況を次々と「分け」つつ、自分なりの「分かり方」をしていく。恐らくそこにも情動系がはたらいているのであろう。「分かる」作業とその結果とによりリアルさを・実感を与える。「分かる私（動的）システム」が、対象を脳内回路に刻印する際、その神経回路パターンが際立てば際立つほど（興奮や結びつきが強いほど）、そして既パターンと一致する度合いが強ければ強いほど、情動系の後ろ盾もあって、覚醒度のより高い認知がなされる。

もちろん記憶系との照合がそこでは必須である。照合の程度が高ければ高いほど、対象認知の「実在感」は増す。それでも、この「分かる私（動的）システム」が、諸事物をそして「私」を最終的

にどう立ち上げるのであろうか。その詳細な仕組みについては未だ不明である。

「分かる私システム」のほとんどは、恐らく無意識的なものである。「分かる」というと意識的な作業というイメージになりやすい。けれども「分かる私システム」のほとんどは、無意識的に作業を行なっている。注意ないしは志向的な機能の揺らぎ¹⁾が、ある瞬間とどまったところが、意識化の対象候補となる。

この揺らぎは全くランダムなものではないようだ。まずは「分かる私システム」自体の特性によって、いわば濃淡がある。つまり、意識化されやすいものとされにくいものがある（階層的なものがある）。そして「分かる私システム」を取り巻く状況が、何らかのインパクトをもたらすことによっても（インパクトがあると解釈されることによっても）、注意がそちらへと向かいやすくなる。

恐らく、主体－客体といったきれいな関係が、あらかじめ「分かる」現象に先立ってあるのではない。主客未分化な状態がまずあり、それが主客に「分かれる」ことが起きている。その中心が「分かる私（動的）システム」である。それはあちら側に「世界」を、こちら側に「私」を結晶化させる。

ついでに言うが、このこちら側に結晶化されて出来る「私という存在」ほど不思議なものはない（同時に「世界」も不思議であるが）。「分かる」ということも、あるいは「意識」ということも、言うまでもなく不思議なことである。この存在論的な不思議さこそが、世にある謎中の謎ではないかと私は思う。

いずれは何でも分かるのか

現段階では、「分かる」ということにはまだまだ不思議さが残っている。それでもいつか将来、私たちは全てのことを分かるようになるのであろうか。先に「幻想」とこの間の事情を述べた。結論はやはり変らない。未完に終るのである。私たちが分かったと思ったとしても、それはあくまで私たちらしい「解釈」に過ぎない。「分かる私（動的）システム」が生み出した仮説に過ぎない。

このことはしかし、素朴な私たちの日常の認知体験に照らしてみると、どうも腑に落ちない。自分のまわりを見回してみよう。いろいろなものが目に入る。机があり、上に様々なものが乗っている。目の前の窓ガラスを通して風景が見える。花がきれいに咲いており、木々の緑も鮮やかである。彼方には山々の連なりも見える……どう見てもそれらはそのように姿を現わしている。これは誰がここから見ても同じではないか。言葉に出して互いに見えているものを指摘し合えば、それらは一致するではないか……確かに一致する。子細に眺めれば、完全に一致すると言ってもいいかもしれない。

それでは何故それらの結果が、解釈だの仮説だのと言われなければならないのだろうか。今「一致する」と述べたが、果たして本当に一致しているのであろうか。対象の名前を挙げれば、確かに

記号レベルで一致をみる。しかし残念ながら一致するのはそこまでである。あるいは無理に広げても、記号の連なりである言葉レベルまでである。

名前や言葉が表わすものは、お互いに似通ってはいても、各人においても同じである保証は何もない。一般にひとりびとりの体験していることを、特に、その質的な面を比較する客観的な物指しはどこにもない。あるのは、個々の「私」が持つ私的な物指しのみである。じれったいことである。つまりは、他者も自分と同じような体験をしている（同じような物指しを持っている）と、「信じる」他ないのである。主観の壁は、どこまでも厚いのである。

これは他者と自分の間での体験の一致・不一致の問題である。事態はある意味もっと深刻である。すなわち、他者云々を考えずにこの私のみについて考えても、困ったことが起きている。この私が何かを「分かった」と思っても、真にその「何かそのもの・こと」を分かったのであろうか。「そのもの・ことを分かる」ということが、一体可能なのであろうか。「分かった」という感覚は確かにあるのに、それでは何が分かったのであろうか。

結論を出すのが少し早いかもしれないが、私は、あるいは私たちは真なるもの、真実、真理などといったものには、永久に到達することはできない（これらは仮説構成体である）。私たちができることは、せいぜい仮構世界（約束世界）を作り上げて、その中になるべく平穏に住み込むことぐらいではないか。

あるいはそれだけでは物足りないと言うならば、物語りを作成してそれを信じ、その流れに添って自分を盛り上げればよい。世界を解明し尽くしたという物語りなどは最高かもしれない。

結論はさておき、「そのもの・こと」を分かる、あるいは「そのもの・こと」に到達することができないということについて、さらに考えていきたい。

相・次元の問題

「そのもの・こと」を難かしく言えば、「客観的実在」という風にも言えるだろう。ここで立場は一応2つに分かれる。客観的実在が「ある」という立場と、客観的実在など「ない」という立場である。世の中では「ある」派が優勢のようであるが、「ない」派の主張も侮れない。

私は折衷的な考え方をしている。客観的実在は「ある」にはあるのだが、先に述べたように、「そのもの・こと」を分かることはできないと考えるのである。客観的実在はどこかにあるにしても、漸近線的な近づき方がせいっぱいというものである。

翻って考えてみれば、この世界のサイズのもつ幅の広さはどうだろう。最大が一応宇宙全体 (10^{27}m)、最小が一応これ以上分割できない大きさ・長さ (10^{-34}m) という、目もくらむような幅の広さである。それぞれは無限に拡大できないし、無限に分割もできないが、とてもではないが、それらは人間に馴染んだスケールではない。

認知の限界について

もともと私たちが日常認識できるサイズは、およそ目が届く範囲、音が聞こえてくる範囲ではないか。現在はさらに遠隔のものを見たり、肉眼では見分けられないものを拡大して見たりする。直接見えないものを可視化したり（CT、MRI など）など、種々の計測装置が開発されている。

しかし「そのもの・こと」は、幅広いサイズにまたがるだけではない。相や次元という捉え方をすれば、事情はもっと複雑である。質的なものも考慮すると、その複雑さ多様さは無限の変化を示すと言ってもよい。私たちの所有する認知能力では、そのほんの一部を私たちの分り方をしてに過ぎない。あるいは仮説的に捉えているに過ぎない。

たとえば、私たちがまわりに見ることのできる事物の様相は、まわりに見る風景は、あくまでこのような大きさレベルの見え方なのである。一本の「木」の見え方と、木々がたくさん集まった「森」の見え方とは違う。この程度ならば、私たちは目で見ることは不可能ではない。けれどもその違いが莫大なレベルの差となった場合、これはとてもではないが手に負える代物ではなくなる。

大きさや相や次元によって姿形や状態を変える対象。「同じ」ということが当てはまらない変化と揺らぎ。従って「そのもの・こと」と言う時に、ある大きさ・相・次元を限定するならば、一応そのレベルでの「そのもの・こと」の把握は可能になりそう。早い話だが、私たちの日常世界において私たちが認知するのは、このレベル限定の把握である。

そもそも「そのもの・こと」という風に私たちは既に限定をしている。もしかしたら「そのもの・こと」は、この私たちが生きている次元、ないしは認識できる次元内にのみ存在しているのかもしれない。大体「そのもの・こと」と言葉で示すところに、私たちの認識上の限界がついてまわっているようだ。そこで言葉・言語と対象認識の問題を考えてみたいが、その前に、私たちの感覚・知覚のもつ限界について触れてみよう。

感覚・知覚の限界

日常生活における感覚・知覚を考える。ものが見え、聞こえ、触れ、味がする、におう。その他の感覚も人間にはあるが、それらの限界を考えるには、例えば「視覚」を取り上げるだけで十分であろう。諸感覚には同型のところがあると思われるからである。

自分の視野の中に様々なものたち（個物）が姿を現わしている。形、色つや、陰影、動きなどなど。その見えるものたちには種々の属性が伴ない、なおかつひとつのものとしてまとまっている。たいていの場合、それらのものたちには名前がついている。

何のことはない。私たちの脳には、それぞれの属性に反応する神経細胞と、それら諸属性を束ねて認識する機能とが備わっている。言い換えれば、私たちの脳にどのような特性をもつ神経細胞が備わっているのかによって、何が見えるかの範囲は既に決定されている。私たちが見る・私たちに見えるまわりの視覚の様相は、詰まるところ、脳（分かる私システム）が手持ちの材料をもとに解

積した様相である。あるいは脳が求めた・見たがった視覚の様相である。

きつかけの「もの」は確かに外界にあるのだが、その「もの」のどこをどう見て捉えるかは脳の都合による。従って、「ものそのもの」を識別するなどは、視覚だけからみてもとても出来ない相談である。「いいとこ取り」というわけではないだろうが、つまみ食いの確かである。見たいものしか見ないのである。

光の3原色などと言い、それは赤・青・緑であるが、色感細胞がこの3種類備わっているだけのはなしである。もっともそれ以前に、広域にわたる電磁波の波長の中の、380nm（ナノメートル）から780nm までの狭い幅のものを可視光線として人間は利用している。光の明るさや色は、脳が生み出したものである。もともと世に明るさや色というものがあったわけではない。人間こそが、明るくそのような色調をもったものとして見ているだけのはなしである。

恐らく生物進化の過程で、より生存のチャンスを高めるために、外界にどのような属性を感じとるかが選択され、あるいは残ってきたのであろう。このような事情は、視覚以外の諸感覚についても成り立つものと思われる。結果、私たちが「外界」はこうなっていると認知しているとしても、それは脳がいわば演出したものということになる。演出という表現が行き過ぎているとしても、「外界そのもの」のうちの一部を取り上げ分かった気になっているのである。

ただ人間の脳には、約一千億もの細胞がある。このものすごい数の細胞どうしがつながり合って、それこそ無数のパターンが形成可能である。従ってそこに生み出される・浮かび上がる像なり認識なりは、かなりの可能性をもつとも言える。

その際に、その可能性を現実化する（意識化かする）上で有力なはたらきをするのが、言語であり論理であり数理であろう。

言葉・言語の限界

さて言葉をうまく操り、表現を尽くせば、対象をかなり掴むことができるであろうか。言葉・言語の影響力はすさまじいものであり、世の中を見渡してみればよく分かる。この社会は、言葉なしでは回らないというぐらい言葉で満ち溢れている。印刷された言葉。画面からスピーカーから流れてくる言葉。人どうしで交わす言葉。人間とは「言葉により生きる生き物」と定義しても良いぐらいである。

文字の発明が歴史の証拠を残し、その継承されたものの土台の上に文明が発展してきた。四つ足生活を脱し、直立したことにより、喉が広がり発声がより自由になった。発語能力を獲得し、複雑なコミュニケーションが可能になった。もとより直立したことにより大脳の容量が増大し、多彩な能力を発揮できるようになった。

それはまた、生活をより安全なものにし豊かにする技術を開拓した。科学を発展させ、ものの認

認知の限界について

識を広め深めた。これら全て、豊かな言語が支えていると言っても過言ではない。この人間世界は、最終的には言語によって動いていると言える。

先にも述べたが、私たちが何かを感じずる際、それをそのままに浸っているよりも、その状態を言葉で括ると、よりリアルな感じがすることが多い。私たちは言葉・言語でもって、外の世界を、自らの体験していることを表現して初めて、対象や体験を強く実感できる。言葉によるいわばアクセントづけが、ものの実感を高め実感を固定している。

そこでこの言葉・言語に何らかの限界があるとすれば、私たちの世界認識あるいは自己認識はやはり限界をもつものとなる。どうであろうか。ここで先に取り上げた『相・次元の問題』『感覚・知覚の限界』を素通りするわけにはいかない。特に感覚・知覚の限界という、言葉に至る前のレベルにおける限界は命取りのようである。たとえば、本丸に到達する前に大手門で撃退されてしまうようなものである。脳に備わっている細胞の特性によって、構築できる世界は既に限定を受けてしまっている。

それでも脳内に生まれる無数のパターンをもってすれば、「そのもの・こと」に言語で迫れるであろうか。言語イコール「そのもの・こと」ではないことは自明なので、ここで期待できるのは、いわばシミュレーションとしての世界像把握である。言語によるシミュレーションで、果たしてどこまで「実在そのもの」に接近できるのかである。

実際問題としては、言語レベルでのみ追求しては、事態は樂觀できないような気がする。やはり言語を駆使しても「語りえぬ事柄」はやはりありそうであり、「沈黙すべきである」ということになるのであろうか。⁵⁾

ここでちょっと目を物理学の分野に転じてみる。そこでは現在、この宇宙の始まりであるとかその前のこと、宇宙の構造、極微の物質世界の成り立ち等々のトピックスについて、相対性理論や量子力学などを基礎に、意欲的な探究が為されている。この調子でいけば、いずれは物質世界の全ての謎が解き明かされるのであろうか。

論理・数理の限界

ニュートンの古典的物理学を乗り越え、アインシュタインの相対性理論が新しい地平を拓いた。「絶対」と思われていた時間・空間が、「相対」的な枠組みの中に位置づけられた。それにしても「相対性」という捉え方が現われたことによって、世の中のいろいろなものの仕組みや関係が、単純に幾つかの理論や法則によって、すっきり説明することがかなわないのではないかという予感が生じたのではないか。

さらにハイゼンベルクの「不確定性原理」が提唱され（物質粒子の位置と運動量、あるいは位置と時間において、片方を特定すればもう片方が不確定になる）、厳密に物質粒子の振る舞いを捕捉

することが、少なくとも極微の世界においては不可能だということが明らかになった。物事を論理的に数理的にきっちりと描き出すかに思っていた物理学の分野にも、不確定性が覆っていることは結構ショックであった。

おまけに数学の分野において、公理系の中には必ずしも証明できないものがあることを示したゲーデルの「不完全性定理」が提出された。この世の中はきちんと美しく数学によって表現できると考えていた向きにとって、これはかなりのショックを与えた。⁶⁾

「相対性」「不確定性」「不完全性」と表現だけを並べてみる。それらが暗示するのは、「絶対的なもの」とか「真理や真実」といったものが、少なくとも私たちが所有している能力によっては、完全には捉えたり表現したりは出来ないということではないか。

かと言って、私たち人間が全くの迷妄の中にあるという訳ではもちろんない。たとえば、真理の円の内側から、ひたすらその円周に接近するべく少しずつ近付くことなら出来ないではないであろう。真理の円の内側に、大きさは小さいが、円に近いものならば描けなくはないのではないか（例えばシュレーディンガーの波動方程式）。ただしそれが、人間的な真理の円に届まるという限界を免れることができないのはもちろんであろう。

ことは何も物理学や数学の世界に届まらない。人文科学や社会科学の分野でも、手詰まり感があるのではないか。物理学や数学の方法を適用し、厳密に事象を解明しようとしても、人間や人間活動、あるいは社会など揺らぎの多い対象相手では、種々の困難がもち上がってしまう。もちろん実験にかけるということもそう簡単には出来ない。

そこで浮上したのが「統計」的手法の導入戦略であろう。特に「確率」という捉え方は、現今幅広く活用されている。事象を白か黒かはっきり区別することが難しい対象がこれらの分野ではほとんどであり、確率によってせめて濃淡を出そうということになる。

はからずも、現代物理学の（今のところ）最先端を行く量子力学においても（相対性理論は古典物理学に入れられる）、物質粒子の存在は確率的にしか表現できない。物質の状態とは、いろいろな状態の「重ね合わせ」から成っており、存在確率でしか捉えられないのである。

さて人文科学、社会科学、その他諸科学において、すさまじい数の研究が遂行され論文等が発表されている。残念ながら、それらが究極の真理に到達することは有り得ない。今まで述べてきたように、種々の「限界」が私たちを取り巻いてしまっている。結論を出したとしても、全ては仮説どまりであり推測どまりということになる。全ては「人間的」な事象把握であり世界構築である。この先いくら研究を積んでいっても、最終ゴールに到達するのは無理である。私たちは実際は、分からないことだらけの世界に生きている。⁷⁾

人間次元における在り方

少々悲観的なはなしになってきたかもしれない。しかし「限界」が分かったことは、むしろ良いことであろう。今後は「人間の次元における人間的認識」という括弧をつけた上での、真理探究をすれば良いのではないか。その場合の大ざっぱな方向性としては、様々な生き物が地球上でどのようにしたら共存できるのか。そして「生」を授けられた存在として、私たちは如何にしたら「良い生き方」ができるのか。こうしたことをまず避けては通れないであろう。

カール・ポPPERの言う「反証可能性」が保証されそうもないが、⁸⁾ 科学的認識が万能でないことを前提にすれば、「生」のもつ一回性、主観性、そして自己組織性などが、具体的なテーマとしてあがりそうな気がする。

加えて、忘れてはならないテーマが「欲望」であろう。人間は知的なものだけを支えに生き抜いていける生き物ではない。多くの局面で人の生活を支配しているのは「欲望」である。「良い生き方」を考えるといても、この欲望の問題を抜きにしては、片手落ちというものであろう。

たとえ知的好奇心と言っても、それも欲望のひとつの現われと捉えられなくもない。そもそも欲望そのものが、良い生き方、安心な生き方、充実し満たされた生き方を目指しているところをもっている。

従ってこれから問題になるのは、人類のもつ過剰な欲望であり、歪んだかたちをとっている欲望であろう。もちろんそのコントロールの問題も、合わせ考えていく必要がある。欲望は暴走すると、そのもとともっている「自己中心原理」のもつ破壊性が増し、他者やまわりを手段化してしまう危険性のあるものだからである。

こうしてみると「良い生き方」といっても、一個人のことに届かず、「社会」や「世界」の在り方にまで拡大する面があるようだ。先に述べた「共存」の問題ともここで繋がってくる。つまり、地球規模の生命圏にまで視野を広げた種々の探索が、これから求められてくる。片や一個人の内面の心の在り方、片や世界規模の生命圏の在り方と、その全体を射程に入れた考察が求められてくる。たくさんの「分からないこと」を前に、怯んでいる暇はどうやらないのである。

参考文献

- 1) 池谷裕二・木村俊介 ゆらぐ脳 文藝春秋 2008.
- 2) 茂木健一郎 意識とはなにかー〈私〉を生成する脳 筑摩書房 2003.
- 3) 茂木健一郎 脳の中の小さな神々 柏書房 2004.
- 4) 前野隆司 脳はなぜ「心」を作ったのかー「私」の謎を解く受動意識仮説 筑摩書房 2004.
- 5) 飯田隆 ウイトゲンシュタインー言語の限界 講談社 2005.
- 6) ジョン・L. カスティ、ヴェルナー・デバウリ 増田珠子訳 ゲーデルの世界ーその生涯と論理 青

土社 2003.

7) 高橋昌一郎 理性の限界－不可能性・不確定性・不完全性 講談社 2008.

8) 小河原誠 ポパー－批判的合理主義 現代思想の冒険者たち14 講談社 1997.